

主な出展リスト

◆《ラ・バヤデール》

AP-171 アンティークプリント／マリー・タリオニ(神とバヤデール)／フランス／1830年
 LT-25 台本／《ラ・バヤデール》台本／ロシア／1930年
 PC-B-160-01 葉書／ヴェラ・トレフィーロヴァ(ラ・バヤデール)
 PC-GD-015-01 葉書／バーヴェル・ゲルトとエカテリーナ・ゲリツェル(ラ・バヤデール)
 PC-GD-024-01 葉書／ミハイル・モルドキンとヴェラ・カラリ(ラ・バヤデール)

◆アンナ・パヴロワ

PR-PAVOF-007 プログラム／アンナ・パヴロワ座 関東大震災被災者のための日本救済慈善公演
 ／英国：ロイヤル・オペラ・ハウス／1923年
 PR-PAVOF-104 プログラム／アンナ・パヴロワ座 日本公演／名古屋：末廣座 大阪：角座
 京都：南座 岡山：岡山劇場 広島：壽座 門司：凱旋座 福岡：大博劇場／1922年
 10月4日～27日
 PR-PAVOF-013ws プログラム(サイン入り)／アンナ・パヴロワ座／米国公演／1924年

◆《青い神》

PR-BROF-03 バレエ・リュス 公式プログラム／レオン・バクスト画《青い神》／
 フランス パリ：シャトレ座／1912年
 AB-19 限定書籍／ヴァツラフ・ニジンスキー《青い神》／画：ロベルト・モンテネグロ
 『ヴァツラフ・ニジンスキー：黒・白・金で彩られた作品の芸術的解釈』／英国／1913年
 BK-185-bio プログラム／映画『ニジンスキー』／監督：ハーバート・ロス／米国／1980年

◆その他

PR-JP-308 プログラム／デンショウン大舞踊團／日本公演／東京：帝國劇場／1925年9月1日
 ～25日
 PH-D-094 写真／ラム・ゴパール
 平野恵美子蔵 チラシ／ウダイ・シャンカール舞踊團／米国公演

主な参考文献・資料

- ◆ 平野恵美子「ウダイ・シャンカールとアンナ・パヴロワ」『外国語教育論集』34. 筑波大学外国語センター、2012.
- ◆ 鈴木晶編『バレエとダンスの歴史：欧米劇場舞踊史』平凡社、2012.
- ◆ 一條彰子編『ディアギレフのバレエ・リュス展：舞台美術の革命とパリの前衛芸術家たち：1909-1929』セゾン美術館、1998.
- ◆ 小倉重夫『瀕死の白鳥：アンナ・パヴロワの生涯』富山房、1978.
- ◆ マチルダ・F. クシェシンスカヤ『ペテルブルグのバレリーナ：クシェシンスカヤの回想録』森瑠依子訳、関口絏一監修、平凡社、2012.
- ◆ Schouvaloff, Alexander. The Art of Ballets Russes. New Haven and London: Yale UP. 1997.

Kenji Usui Ballet Collection

India as Depicted in Ballet

～ Imagination and Creation ～

2022/1/13 (Thu.)～2022/3/6 (Sun.)

(2022/1/31～2/7は冬季休館日です。その他の休館日はwebでご確認ください。)

◎ 企画・監修

関 典子(せき・のりこ)／薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター

Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)
 舞踊家・振付家・舞踊研究者。幼少よりクラシックバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学
 研究科准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞等受賞。

◎ ゲスト監修・解説

平野 恵美子(ひらの・えみこ)／中京大学教養教育研究院特定任用教授、
 神戸市外国語大学客員研究員、洗足学園音楽大学非常勤講師)
 Emiko Hirano (Professor in Residence of Chukyo University)
 バレエを中心とするロシア芸術文化の研究執筆に携わる。主な研究テーマは、ロシア帝室劇場
 バレエ、バレエ・リュスなど。東京大学大学院で博士(文学)の学位を取得。『帝室劇場とバレエ・リュス』
 (未知谷、2020年)で令和2年度(第71回)芸術選奨「評論等部門」文部科学大臣新人賞受賞。

若林絵美(わかばやし・えみ)／薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタントキュレーター
 Emi Wakabayashi (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

後藤俊星(ごとう・しゅんせい)／薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタントキュレーター
 Shunsei Goto (Assistant Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二 バレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22 tel: 0798-68-0223 (代表) fax: 0798-68-0212



Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二 バレエ・コレクション
 2022 企画展

バレエで描かれたインド

～想像と創造～

2022/1/13 (Thu.)～2022/3/6 (Sun.)

(2022/1/31～2/7は冬季休館日です。その他の休館日はwebでご確認ください。)

バレエとインド——意外な組み合わせと思う方もいるでしょうか。列強によって植民地化された東洋の国々は、ヨーロッパ人の想像力を掻き立てる場所でもありました。リムスキー＝コルサコフ作曲のオペラ《サトコ》中の有名なアリア《インドの歌》は、真珠や宝石に満ちた夢のような土地の情景を、異国情緒たっぷりに歌い上げます。

本展ではバレエとインドの関わりをご紹介します。まずは古代インドの寺院を舞台にした《ラ・バヤデール》。「白鳥」のイメージが強いアンナ・パヴロワも、インドをテーマにした舞踊を上演しています。ミハイル・フォーキンは、《青い神》というヒンドゥー教にインスピレーションを得たバレエを創りました。ルース・セント・デニスにはアメリカ人ですが、インドの舞姫に扮した衣装で踊り、評判になりました。バレエ・リュスのバレリーナだったアリシア・マルコヴァは、インド人青年ラム・ゴパールとパートナーを組んでいます。19世紀から20世紀にかけてバレエやダンスで取り上げられた、インドの様々な表象をご覧ください。

Hyogo Performing Arts Center

列強による植民地化と並行するように、18世紀末までにインドの古典文学が英語やドイツ語に翻訳されます。『マハーバーラタ』に感銘を受けたゲーテは、『ファウスト』のプロローグにその挿話「シャクンタラー姫」を取り入れ、ハイネの詩によるメンデルスゾーンの名曲（歌の翼に）では、ガンジス川の辺りの優美な風景が歌われました。こうして美化・理想化されたインドが、オペラやバレエのテーマになるまでに時間はかかりませんでした。『ラ・シルフィード』などのロマンチック・バレエを振り付けたフィリップ・タリオニ、クラシック・バレエの父マリウス・プティパ、バレエ・リュスの振付家ミハイル・フォーキンら有名なバレエ・マスターたちが、インドに題材を採った作品を創りました。

《ラ・バヤデール》

フィリップ・タリオニはゲーテの原作による《神とバヤデール》（1830年初演）を振り付けました。娘でロマンチック・バレエの代名詞と呼ばれるマリー・タリオニが、インドの舞姫を演じています。マリウス・プティパの兄で、パリ・オペラ座のバレエ・マスターだったリュシアン・プティパは、『シャクンタラー姫』（1858年初演）を創りました。

しかし何となく一番有名なのは、マリウス・プティパが振り付けた《ラ・バヤデール》（1877年初演）でしょう。薄明かりの中、白い衣裳を身につけたバレリーナたちが次々と現れる幻想的な「影の王国」は、いわゆる「白いバレエ」の代表的な場面です。様式的にロマンチック・バレエとクラシック・バレエの中間に位置する作品と言えます。同じ1877年にはモスクワのポリショイ劇場で、『白鳥の湖』（W・ライジンゲル振付）が世界初演されていました。

英国による植民地化が進む時代、中央アジアの覇権を強めていたロシアにとって、すぐ南下に位置するインドは目を離せない地域でした。帝室劇場のバレエで取り上げられる題材は、政治と無関係ではないのです。



マリー・タリオニ（神とバヤデール）



ヴェラ・トレフィロヴァ（ラ・バヤデール）



ミハイル・モルドキンとヴェラ・カラツリ（ラ・バヤデール）

アンナ・パヴロワ

不世出のバレリーナ、アンナ・パヴロワは1922-23年、日本、中国、インドなどを巡るアジア・ツアーを行ないました。日本では約2ヶ月の間に10都市を巡演し、日本人にバレエに対する強い関心を植え付けました。一方、パヴロワもまた東洋の国々の芸術に魅せられ、これを自分の作品に取り入れました。

日本を訪れた翌年の1923年、パヴロワはロンドンのロイヤル・オペラ・ハウスで《東洋の印象》というプログラムを上演します。これは9月に起きた関東大震災の被災者支援の慈善公演でもありました。この中でパヴロワは日本舞踊とインド舞踊を披露しました。来日の際、著名な歌舞伎俳優らと親しく交流し、日本舞踊の手ほどきは実際に受けましたが、インドでは舞踊手の社会的地位が低く、指導を受けることが出来ませんでした。ですが宗主国であった英国には、多くのインド人がいました。ウダイ・シャンカールは本国では上流階級の出身で、ロンドンで美術の勉強をしながら、父親とともにインドの伝統芸能を演じる一座に参加していました。パヴロワはこの無名のインド人青年とパートナーを組み、大きな評判を呼びました。このことは、植民地支配の影響で廃れていたインド伝統舞踊の復興にもつながりました。パヴロワは次の1924年の米国公演でも《東洋の印象》を上演しています。なおウダイは、世界的に著名なシタール奏者ラヴィ・シャンカールの長兄でもあります。



アンナ・パヴロワ（ヒンドゥーの踊り）



ヴァツラフ・ニジンスキー（青い神）

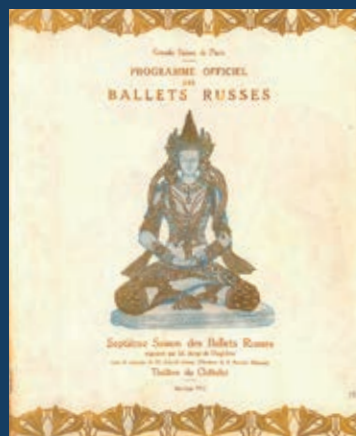
《青い神》

《クレオパトラ》（1909）と《シェヘラザード》（1910）によって、バレエ・リュスはパリで大きな成功を収めました。一座を率いたセルゲイ・ディアギレフは、東洋趣味が人気を博すのを見て、次はインドを主題にしたバレエを上演しようと考えます。

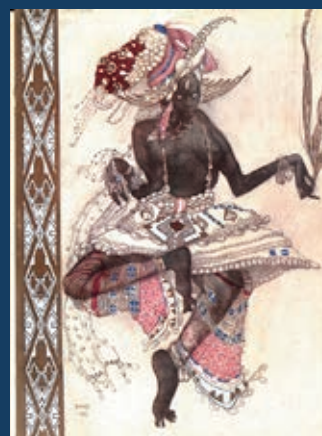
振付を担当したミハイル・フォーキンは、およそ10年前の1900年にペテルブルクの帝室劇場に客演したタイの舞団に感銘を受けていました。美術にも造詣が深かったフォーキンは博物館で仏像を熱心に研究し、振付に応用しようとしていました。作品自体は成功したとは言えませんでした。一座のスター、ヴァツラフ・ニジンスキーは高い跳躍で人気を博していましたが、《青い神》では静止したポーズが多く、このことが不人気の原因の一つだったとされています。しかし同年の1912年にニジンスキーが振り付けた《牧神の午後》が跳躍を封印し、二次元的な構成で歴史に残る作品になったことを考えると、フォーキンにもまた先駆的なところがあったのではないのでしょうか。

レオン・バクストの手によるデザイン画やスチール写真は今も強烈な印象を残します。インドの仏像と同じポーズや細密画に描かれている神のような青い肌。タリオニやプティパの時代と違い、パヴロワやフォーキンは実際に異国の芸術文化に触れ、そこから新しい舞踊を生み出そうとしました。これは単なるオリエンタリズムではなく、「ジャンル・ヌーヴォー」（新しいジャンル）と呼ばれるものです。

- [振付] ミハイル・フォーキン
- [音楽] レイナルド・アーン
- [美術] レオン・バクスト
- [台本] ジャン・コクトー、フェデリコ・デ・マドラソ・イ・オチョーア
- [初演] 1912年5月13日 パリ、シャトレ座



バレエ・リュス 公式プログラム 1912年



《青い神》レオン・バクスト画



《東洋の印象》



ウダイ・シャンカール



ウダイ・シャンカール舞踊団 米国公演のチラシ